

福岡市

# 大谷古墳群 II

—福岡市城南区梅林所在の後期群集墳の調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第122集

1985

福岡市教育委員会

福岡市

# 大谷古墳群 II

—福岡市城南区梅林所在の後期群集墳の調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第122集

1 9 8 5

福岡市教育委員会

福岡市

# 大谷古墳群 II

—福岡市城南区梅林所在の後期群集墳の調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第122集

1 9 8 5

福岡市教育委員会



## 序

本市の南に位置する油山北麓には数多くの古墳が築造されているので有名です。1970年、本古墳群を含む地域が民間開発によって宅地造成されることとなり、福岡市教育委員会では開発に先立って発掘調査を実施しました。

調査によって、後期群集墳の構造を明らかにするとともに、鉄滓を供獻する古墳の一つとして学術的にも貴重な成果を得ることができました。一部は報告書の刊行を完了していましたが、残り3基の古墳については諸般の事情により未刊行でしたが、ここによく刊行できることとなりました。

本書を広く活用されることを願うとともに、発掘調査から資料整理にいたるまで、指導員の先生方をはじめ多くの関係者からいただいた助言・指導・協力に対し深甚の敬意を表するものであります。

昭和60年3月31日

福岡教育委員会

教育長 西 津 茂 美

## 例　　言

1. 本書は昭和46年2月25日～4月3日に発掘調査を実施した福岡市城南区梅林に所在する大谷古墳群の第一次調査の報告である。
2. 掲載図面の原図は西田道世、二宮忠司、横山邦継、高木正文、山崎純男が作成し、製図は山崎がおこなった。
3. 遺跡写真は二宮忠司、山崎純男がおこない、遺物写真は宮島成昭氏が撮影をおこなった。
4. 本文の執筆は、二宮忠司、西田道世、横山邦継、山崎純男と協議し、山崎がこれをまとめた。
5. 本書の編集は山崎純男がこれをおこなった。
6. 本書の執筆は昭和52年2月に終えたが、その後の事情で刊行がおくれた。内容に若干の訂正が必要であるが、あえて訂正していないことをことわっておく。

# 大谷古墳群 II

## 本文目次

第1章 序説	1
1. はじめに	1
2. 調査組織の構成	4
第2章 調査の記録	5
1. 大谷1号墳	5
2. 大谷2号墳	10
3. 大谷3号墳	17
4. 黒色土層の調査	23
第3章 総括	25
1. 古墳の年代と群の構成	25
2. 被葬者の性格	28

## 挿図目次

Fig. 1 大谷古墳群分布図	2
Fig. 2 大谷古墳群第1～3号墳の位置	3
Fig. 3 大谷1号墳石室実測図	6～7
Fig. 4 大谷1号墳出土遺物実測図 I	9
Fig. 5 大谷1号墳出土遺物実測図 II	10
Fig. 6 大谷2号墳墳丘測量図	12
Fig. 7 大谷2号墳墳丘断面図	12～13
Fig. 8 大谷2号墳石室実測図	12～13
Fig. 9 大谷2号墳出土遺物実測図 I	15
Fig. 10 大谷2号墳出土遺物実測図 II	17
Fig. 11 大谷3号墳墳丘測量図	19
Fig. 12 大谷3号墳墳丘断面図	21
Fig. 13 大谷3号墳石室実測図	22
Fig. 14 黒色土層出土遺物実測図	24

## 図 版 目 次

- 大谷PL. 1 (1) 大谷 1 号墳石室石組  
(2) 黒色土層第 4 地点
- 大谷PL. 2 (1) 大谷 2 号墳遠景 (発掘前)  
(2) 大谷 2 号墳遠景 (発掘後)
- 大谷PL. 3 (1) 大谷 2 号墳遠景 (東より)  
(2) 大谷 2 号墳遠景 (発掘後)
- 大谷PL. 4 (1) 大谷 2 号墳墳丘遺存状態 (北より)  
(2) 大谷 2 号墳墳丘遺存状態 (東より)
- 大谷PL. 5 (1) 大谷 2 号墳の墓壙と石室 (北より)  
(2) 大谷 2 号墳の墓壙と石室 (西より)
- 大谷PL. 6 (1) 大谷 2 号墳石室石組  
(2) 大谷 2 号墳墳丘遺物出土状況
- 大谷PL. 7 (1) 大谷 3 号墳の立地  
(2) 大谷 3 号墳全景
- PL. 8 (1) 大谷 3 号墳の石室と配石  
(2) 大谷 3 号墳石室
- PL. 9 (1) 大谷 3 号墳全景 (石室腰石)  
(2) 大谷 3 号墳石室腰石の状態
- PL.10 大谷 1 号墳出土上遺物
- PL.11 大谷 1・2 号墳、黒色土出土遺物

# 第1章 序 説

## 1. はじめに

本遺跡は油山北麓に築造された古墳群である。昭和45年、本古墳群を含む油山北麓の広範な地域が東信建設株式会社によって宅地造成されることとなった。これを受けた福岡市教育委員会文化課では同地域の現地踏査を実施し、古墳および古墳らしきものの数10ヶ所を確認し、破壊やむなき古墳について別記の調査団を組織して発掘調査を実施した。調査は調査者の都合により二期に分けて実施した。第一次調査は昭和46年2月25日～4月3日の38日間、第二次調査は昭和46年7月2日～10月24日の114日間にわたって実施したが、原因者である東信建設株式会社が調査途中において倒産し、第二次調査は一部国庫補助を受けて調査を継続し、報告書は第二次調査分のみを収録したにとどまる。第一次調査については永年未報告であったが今回どうにか報告の義務のみは果すことができた。内容の深化を計らねばならないのであるが、その責を果しえなかつたのは、ひとえに筆者の怠慢である。

なお本古墳群は一部は駿ヶ原古墳群と重複しているが、地名表に未収古墳が多く新たに大谷古墳群とした。調査の進展と共に古墳とされていたもの多くは自然石の露頭であったり、調査時の分布調査で新たに発見された古墳もあり古墳群に混乱が生じていたので今回改めて名を付した。大谷古墳群と呼称するものは計10基の古墳である。

古墳編	1号墳 横穴式石室(单室)	2号墳 横穴式石室(单室)	3号墳 穹穴式石室	4号墳 横穴式石室(单室)	5号墳 横穴式石室(複室)	6号墳 横穴式石室(单室)	7号墳 横穴式石室	8号墳 横穴式石室(单室)	9号墳 横穴式石室(单室)	10号墳 横穴式石室(複室)	1969, 1971, 地名表	A6312, 駿ヶ原3号古墳	1972, 大谷古墳
第1次調査	1号墳 横穴式石室(单室)	2号墳 横穴式石室(单室)	3号墳 穹穴式石室	4号墳 横穴式石室(单室)	5号墳 横穴式石室(複室)	6号墳 横穴式石室(单室)	7号墳 横穴式石室	8号墳 横穴式石室(单室)	9号墳 横穴式石室(单室)	10号墳 横穴式石室(複室)	1969, 1971, 地名表	A6312, 駿ヶ原3号古墳	41号墳
第2次調査													23号墳
													50号墳
													8号墳
													7号墳
													51号墳
													14号墳
													20号墳
													60号墳
													49号墳

注① 緒方勉編「大谷古墳群I」福岡市埋蔵文化財調査報告書第19集 1972年

福岡市教育委員会「埋蔵文化財調査地名表第一集一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第6集 1969年

② 福岡市教育委員会「埋蔵文化財調査地名表 総集編一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集 1971年

③ 注①と同じ



Fig. 1 大谷古墳群分布図

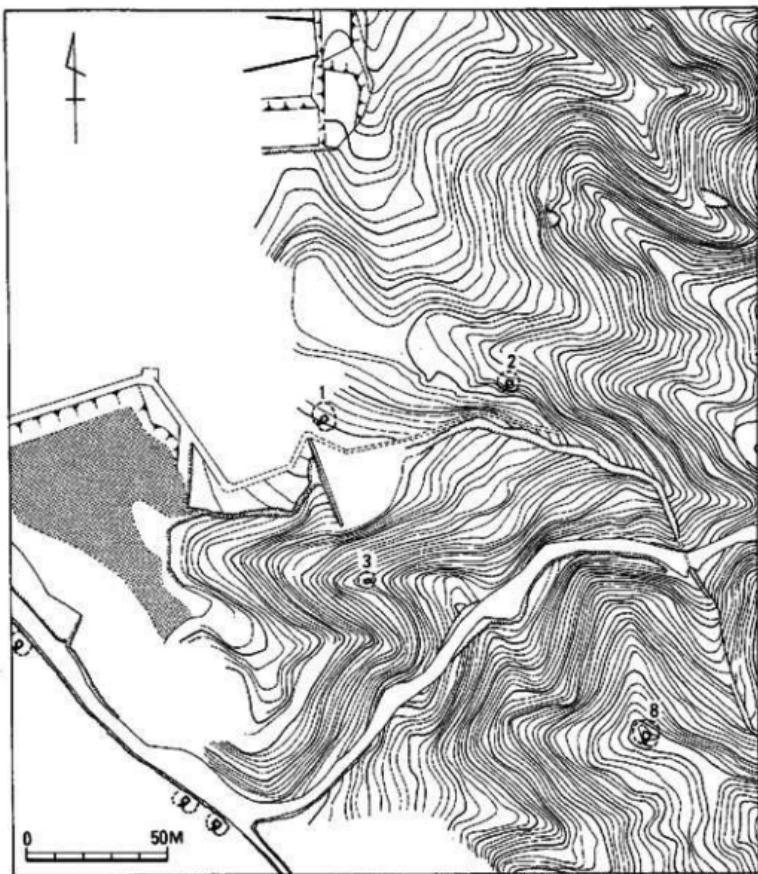


Fig. 2 大谷古墳群第1～3号墳の位置

なお、「大谷古墳群Ⅰ」(1972)において47号、48号、52号～59号、60号は駄ヶ原古墳と同一水系にあり、「倉瀬戸古墳群」(1973)における呼称に従っておきたい。また駄ヶ原古墳群はさらに、その後の分布調査において基數が増加しているので正確な位置の確認後改めてAの訂正を行いたいと思っている。

註① 小田富士雄編『倉瀬戸古墳群』 1973年

## 2. 調査組織の構成

### 第一次調査

調査期間 昭和46年2月25日～4月3日

調査委託者 東信建設株式会社

調査担当者 三島恪（福岡市文化課）

山崎純男

二宮忠司

樋山邦雄

西田道世

なお鏡山猛、岡崎敬、水井昌文（九州大学）、賀川光夫（別府大学）、森貞次郎（九州産業大学）の諸先生からは御指導を受けた。また市文化課の下條信行、柳田純孝、塙屋勝利、折尾学、島津義昭、沢重臣、国平建三の各氏、高木正文氏、小柳英夫氏、東信建設株式会社、梅林中学校には、御教示、御協力をたわました。記して感謝の意を表したい。

## 第2章 調査の記録

### 1. 大谷1号墳

#### (1) 位置と現状

丘陵斜面の谷との境界、傾斜変更線上に位置し2号墳と同一丘陵の谷の出口に近く、2号墳との距離は約70m、標高68mの地点である。本次の調査地域外に位置するが、所有者小柳英夫氏の諒承を得て石室の清掃と実測調査を実施した。現状は草木が繁茂し、石室玄門部が開口し巨石墳であることは判明していたが、後部の石材はことごとく抜き取られていて、その規模については不明であった。

なお、本墳は「埋蔵文化財遺跡地名表」の中で写真を示し駄ヶ原3号墳としているが、分布調査時に41号墳として示されたもので分布的にも駄ヶ原古墳としては適当でなく改めて大谷1号墳とする。

#### (2) 横穴式石室 (Fig. 3)

本墳の埋葬施設は主軸方向をN 44° 30' - Wにとり西側（谷）向って開口する單室の両袖型横穴式石室である。石室はすでに天井部の一部および後部天井、壁体の大部分を失っている。玄室内は深く土壌によって埋没していたが、すでに盗掘を受け床面下まで徹底して破壊、擾乱されていた。なお、盗掘は後部が完全に埋っていたために、その部位は石室崩落時に破片となった土器群が比較的良好な状態で残存していた。

石室には巨石を用いた、いわゆる巨石墳の範疇にはいるものである。

石室は方形プランを有する玄室前壁中央部に細長い後部天井を連接したものである。後部天井よりやや玄室よりに第1軸石が配置され、この部分に閉塞施設がなされたと考えられるが確認できなかった。玄門部に第2軸石が配され後部天井を形成する。石室全長は左壁で8.4m、右壁で8.35mで左右壁長はほぼ同じである。石室に使用される石材はすべてが花崗岩の割石、転石で、腰石には円石を用い石室平面プランは整然としている。

註① 「埋蔵文化財遺跡地名表—第1集—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第6集 1969年

## 玄室

奥幅2.8m、前幅2.9m、右壁長2.9m、左壁長2.9mをはかる方形プランを示す。壁体の構築法は各壁体ともに共通している。奥壁および左右壁には $1m \times 1.2m \sim 1.5m \times 1.6m$ の割石面をととのえた転石の垣石各2個をたてて腰石としている。腰石から上方は大ぶりの割石、転石を水平方向に目路かどるように横積みに、3~4段積みあげ壁体としている。奥壁、左右壁の腰石は垂直かやや内傾し、腰石上方の石より持ち送られている。奥壁と側壁の隅角は腰石部で奥壁をはさみ込むように配置されるが、腰石の上からは互いに重なる三角持込み手法を用いて石室の補強をはかっている。また壁体の各口石の間隙には小石・粘土を充填している。天井部には厚さ約1mの巨石1個を構架している。床面は搅乱されて存在しないが、床面下の地山面から天井までの高さは約2.8mをはかる。

玄門部は素型の両袖で特別な施設はない。袖幅は左袖が0.8m、右袖が0.7mを計る。袖石には未加工の転石を縱位に立てている。左袖石上にはさらに一石を横積みにして右袖と高さをそろえて玄門部天井石が構架される。玄門部天井石も厚さ約1mの口石が使用される。第2樋石上面から天井までの高さは1.1mをはかる。

床面は数度におよぶ盗掘によって搅乱されているが、一部に青白色の良質粘土が存在するところがあり、さらに一部ではあるが散石と考えられる石が存在することから考え、床面の高さは第2樋石上面とほぼ同じ高さであったと考えられる。実測図中の周壁部にそって存在する右は一部の散石を除いて他は腰石の根固め石である。床面に散石があったことは考えられるがその範囲等については知ることができない。

## 黄道

天井部を欠失し、左右壁も腰石を残すのみで、狭道後半部の腰石左右壁共抜き取られていてその残存状態は悪い。抜き取られた腰石は抜き跡、根固め石の存在から左右壁の抜き取られた腰石は各2個である。狭道長は左壁で5.6m、右壁で5.5mをはかる。狭道幅は第2樋石で1.4m、第1樋石で1.45m、端部で1.38mとほぼ一定しており、壁面を直線的にそろえている。壁体は腰石を残すのみであるが、石室の壁体とはほぼ同様であったろう。

床面には2ヶ所に樋石が配される。第1樋石、第2樋石共に細長い割石と方形の割石をたてている。奥壁中央部から、その前面までの距離はそれぞれ5.2mと3.2mをはかる。狭道床面は玄室床面より約10cmさがり、狭道前半部はゆるやかに傾斜する。

## (3) 遺 物

### 出土状況

すでに盗掘されていて、玄室内は床面下まで搅乱されていて、鉄錠等の小片がみられたにすぎないが、狭道後半部は壁体の崩落が古かったと思われ、狭道後半部には盗掘はおよんでいない。狭道後半部の遺物は

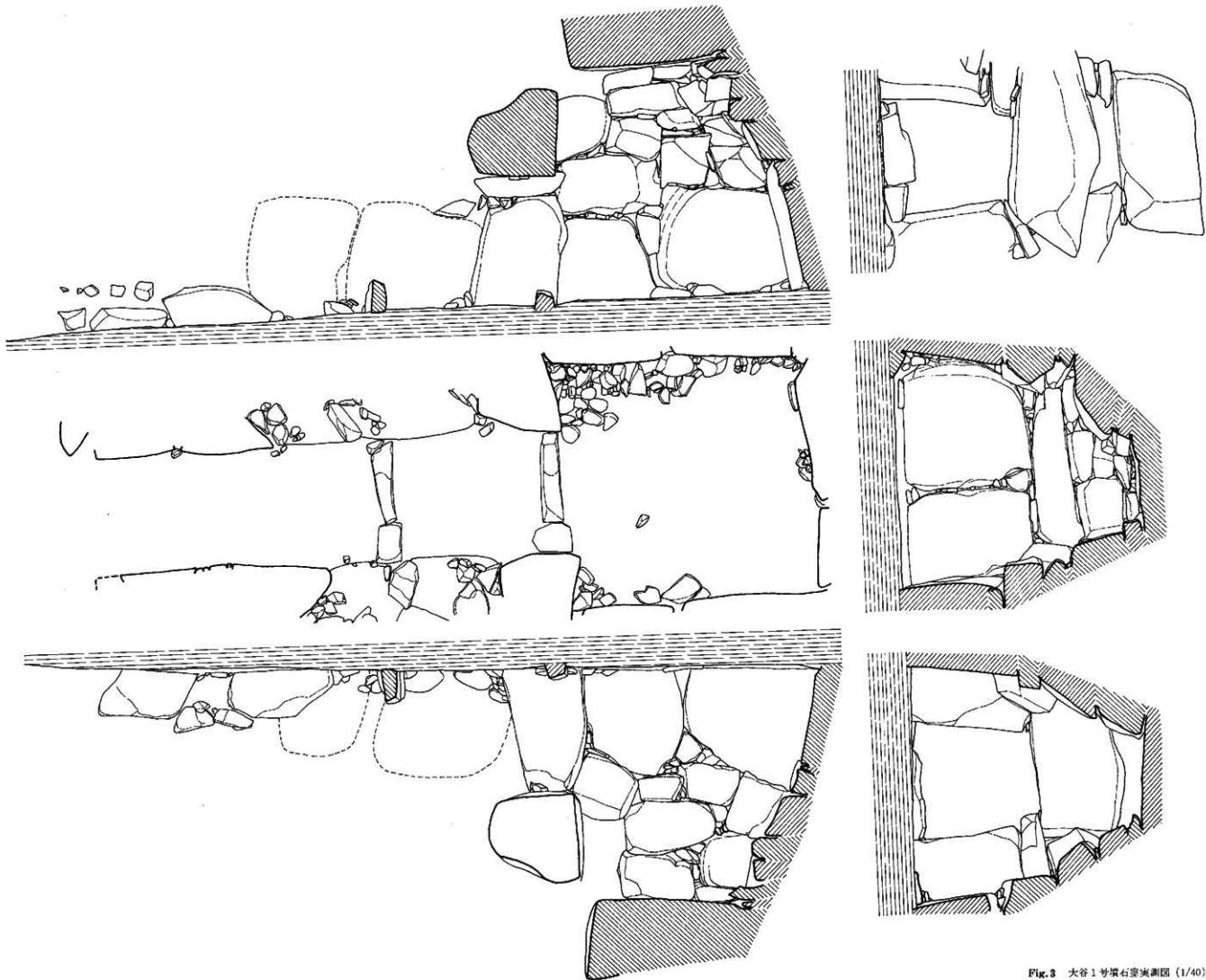


Fig. 3 大谷 1 号墳石室実測図 (1/40)

壁体の崩落に伴う落石のために破片となっていたが、須恵器、土師器が一括してみられた。これらの遺物はほぼすべてが接合でき完形となるが、原位置については不明である。

本墳から出土した遺物は次の如くである。

容器 須恵器

土師器

武器 鉄鎌

農具 U字形鋤先

須恵器

杯蓋 (Fig. 4) 5個体出土した。後半部の出土である。整形技法、形状より2類に大別する。

I類は内面のかえりが口端部より下方にのびるもので小型品である。II類は内面のかえりが口端よりでないものでI類より大型品である。

I類 (Fig. 4-1) 平坦な天井部を有し、体部と天井部のさかいは不明瞭、口端部はゆるやかに外へひろがり、端部は丸くおさめる。内面のかえりは低く内傾し、口端部よりわずかに下方へのびる。焼けひずみがありいびつである。ヘラ削りは天井部の後の範囲に施され、ヘラ削りの方向は逆時計まわりである。天井部以外は横ナデによって調整される。胎土には荒い砂粒を含み焼成は良好、色調は青灰色をなす。平均口端径11cm、かえり径8.5cm、器高3cm。

II類 a. (Fig. 4-2~4) 平坦な天井部より体部、口縁部へと移行する。口端部は丸くおさめる。内面のかえりは低く内傾し口端部よりでない。天井部は丸くへら切り端で、その後に荒いへら削りが天井部の平坦面の範囲に施される。へら削りの方向は逆時計まわりである。他は横ナデによって調整される。胎土は精良であるが焼成は良くない。色調は黒灰色をなす。口端径12.9~14.0cm、器高2.5~2.9cm。

II類-b. (Fig. 4-5) I類-aと整形形状は同様であるが、天井部中央につまみを有するものである。つまみは消失するが扁平な宝珠形つまみがついていたものであろう。胎土には砂粒を含み、焼成は不良、色調は赤褐色をなす。口端径14.2cm、器高(つまみを除く) 2.7cmをはかる。

杯 7個体出土した。高台を有するもの (II類) と高台を有しないもの (I類) に大別する。

I類-a. (Fig. 4-6) 口径9.5cm、器高3.3cmの小型の杯である。底部は丸く、口縁部はやや外へ開きながらちあがる。口端部は丸くおさめる。底部全面にへら削りが施されるが丁寧でなく一部指による調整もみられる。他は横ナデによって調整される。底部にへら記号が認められる。全体に自然釉がかかる。焼けひずみがありいびつである。胎土に砂粒を含む。焼成は良好、色調は黒灰色をなす。

I類-b (Fig. 4-7) 口径13cm、器高3.9cmでI類-aより大型品である。底部は平底で静止へら削りによって調整される。他は横ナデによって調整される。胎土は精良で焼成は良好、色

調は外面が赤褐色、内面が黒灰色をなす。

II類-a (Fig. 4-10) 口径10.2cm、器高4.1cm、高台径7cmの小型の壺である。焼けひずみがありいびつである。体部、口縁部は外傾しながらたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。高台は高くなく、端部が外側へつまみ出される。底部はヘラ削り調整、体部、口縁部は横ナデの調整、内底部は多方向のナデによって調整される。胎土は精良で焼成良好、色調は黒灰色をなす。

II類-b (Fig. 4-8, 9, 11) 底部と体部の境は丸くなり口縁はやや外反しながらたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。高台はあまり高くなく外方へふんばる。8は高台は欠失する。底部はヘラ削りが施される。ヘラ削りの方向は逆時計まわりである。体部、口縁部は横ナデ、内底部は多方向のナデによって調整される。内底部には粘土のつなぎ目がうず巻き状に残る。胎土には若干の砂粒を混じえるが精良である。焼成は不良でいわゆる生やけの須恵器である。色調は赤褐色～黄褐色をなす。口径13.0～14.4cm、器高4.6cm、高台径8.2～8.4cm。

II類-c (Fig. 4-12) 底部と体部の境は不明瞭で、体部口縁部は外傾し真すぐに立ちあがり口縁端部は丸くおさめる。高台は高くなく、外方へふんばり、脚端面は外方に向く、底部はヘラ削りが施される。ヘラ削りの方向は逆時計まわり。外底部にはヘラ記号が認められる。高台、体部口縁は横ナデ、内底部は多方向のナデによって調整される。胎土は精良で焼成は良好、褐色をなす。口径14.5cm、器高4.9cm、高台径11.5cm。

長頸壺 (Fig. 4-14) 全体に自然釉をかぶった台付長頸壺の優品である。細長く外反する頸部は体部上面中央で接合され中位よりやや下方に2条よりなる凹線がめぐらされる。口縁部は大きく外反し端部は丸くおさめられる。体部は肩部と胴部よりなり、ゆるやかな稜をもって境をなす。肩部には三本の凹線をめぐらし区画された内側は擗目刺突文で飾られる。頸部の接合部は削り出しの突帯一条がめぐる。胴部下半にはカキ目調整が施される。高台は外方へひろがり端部を内方へつまみ出している。高台径10cm、体部最大径16.6cm、器高25.1cm、焼成は良好で色調は黒灰色をなす。

#### 土師器

椀 (Fig. 4-13) 丸底よりやや内湾しながらたちあがる椀で外面な横位のヘラ研磨で調整し、内面は湾曲する斜位のヘラ研磨が暗文状に施される。胎土は精良で、焼成良好、赤褐色をなす。口径17.2cm、器高5.8cm。

#### 武器

鉄鎌 (Fig. 4-1～9) 9点の出土があるが、いずれも破片で完形を保つものはない。鎌部を有するもの(1)のみで、片刃式のものである。棒状部と莖部の境に棘がある。(3, 4, 6, 9)

#### 農具

U字形鋤先 (Fig. 10) 耳部の小破片で全形は知ることができないが中形のU字形鋤先である。

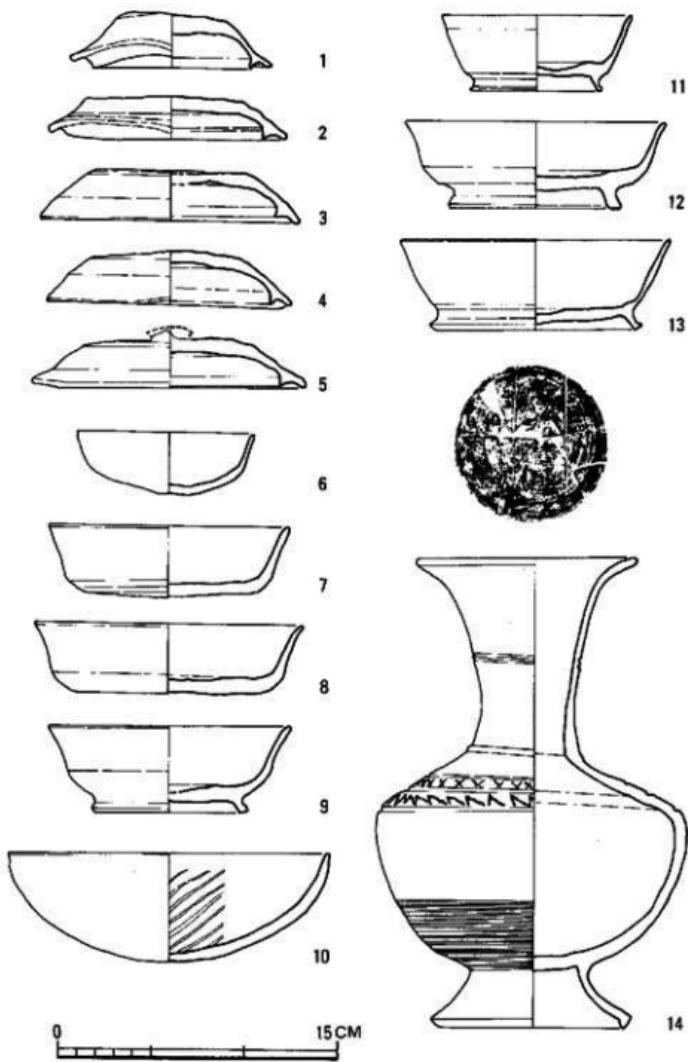


Fig. 4 大谷 1 号墳出土遺物実測図 I

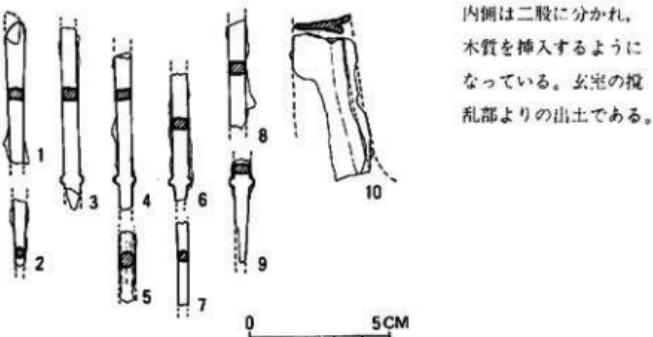


Fig. 5 大谷1号墳出土遺物実測図

## 2. 大谷2号墳

### (1) 位置と現状

丘陵の南斜面中腹に位置し、同一丘陵に位置する1号墳との距離は約70mであり、1号墳よりも谷の奥部に存在する。古墳は急斜面中腹に位置するために大きく変形し、羨道部は斜面にそって崩壊し右壁は完全に消滅し、左壁はかろうじて、その全長をつかむことができる。石室は玄室部は完全な状態で遺存していたが、墳丘は斜面の花崗岩風化土の流土によってほとんど埋まり墳頂部がわずかに平坦面となり張り出す程度で、丘陵尾根から見た場合は古墳としての識別は困難である。谷から見た場合、開口した石室によってかろうじて古墳として識別できる。

### (2) 外部施設

#### 地山整形

古墳は丘陵斜面の等高線に直交する方向で構築したものである。しかし、地山整形は通常の後期古墳にみられる馬蹄形状の溝の掘削と、溝の内側（墳丘基底面）の整地という順序は認められず、墓塙掘削に伴い、墓塙前面に盛土し、墓塙底面と同じ高さの平坦面を作り出している。しかし、本墳の場合羨道左壁が土砂の流失によって傾斜しながらわずかに残る程度で存在し右壁は完全に消滅しその状態は悪く、その作業を想定するにとどまるが、先に報告された大谷4号墳にその状態が完全に遺存していた。4号墳の基礎構築の状態の概略を参考に記すると次の如くである。「墓塙底面の高より約5m下の斜面を基点として旧地表面に手を加えることなく盛

上しその表面には大小の石材を石垣状に積みあげその高さは墓壇底まで達している。石垣状の石積みには裏ごめ石の配慮もはらわれている。範囲は半径約4.4mで半円形状に構築される。

### 墳丘

墳丘は石室玄門部をほぼ中心として盛土を行っている。

墳丘の形成過程は大きく2段階に分けることができる。第1段階は石室構築の壁石の裏ごめ的なもの、第2段階は穴井部の被覆と墳形をととのえるものである。

第1段階は墓壇内に腰石を安定後、壁石の積みあげに平行して花崗岩風化土と赤褐色、暗褐色粘質土層を交互に叩きつめながら盛土されている。石と石との間隙には小石や赤色粘土等を充填して固定している。この段階の盛土は墓壇よりさほど広がらず墓壇より1~1.5mの範囲で周壁上端部まで行っている。

第2段階の盛土は第1段階の盛土に比べてあまり硬く叩きしめられていなく流失の状態も著しい。暗褐色土層、褐色土層2枚が認められるが、第1段階の盛土に比べればその厚さは厚い。第1段階の盛土をおおい更に墳丘平面形をととのえたものと思われるが、墳丘前面においてはほとんど流失している。また墳丘後側すなわち丘陵斜面側には第2段階の盛土はみられない。

墳丘遺存高は斜面側では0.5mと極めて低く、石室床面から2.6m、谷側の墳丘基底面からは4.2m（後方部の地すべりを考慮すれば若干低くなろう。）と高く、石室開口側すなわち谷よりみた場合、見かけの墳丘はかなり大きなものとして写る。

墳丘平面形はIV区では盛土の流失が著しく判明しないが、I~III区では墳丘裾と斜面の間に堆積した黒色土層によって明確に把握することができる。その規模は東西約12m、南北約10mの円形プランを有している。

### 墓道と墓道

墓道は墳丘を除去し完全に観察することができたが、墓道については地すべりにより消失している。前述した後方部基礎構築を考えれば、階段状の墓道が考えられるが不明である。

墓壇は花崗岩岩盤にはば垂直に掘り込まれたもので、平面形は隅丸長方形をなすが、玄室中央部がやや広くなる。墓壇は玄門部で消失するが、これは前述した基礎構築と符号する現象である。奥壁では墓壇は2段に掘削され、一段目は幅約30cmの平坦面を有し墓壇の両隅において墓壇側面に消失する。墓壇は長さ4.55m、幅は奥部で3.5m、玄室中央部で若干広がり4.5mを計る。深さは奥部東側で1.59m、西側で1.14mで玄門部で消失する。

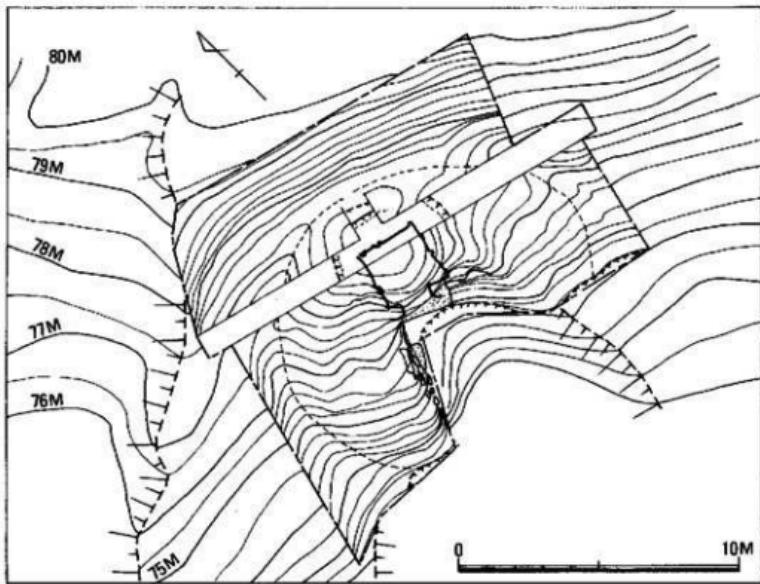
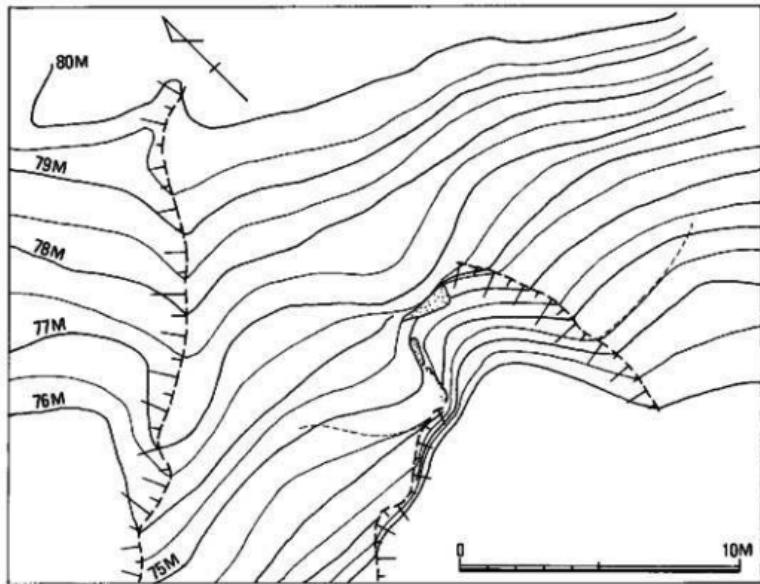


Fig. 6 大谷 2 号墳埴丘測量図（上：発掘前、下：発掘後）

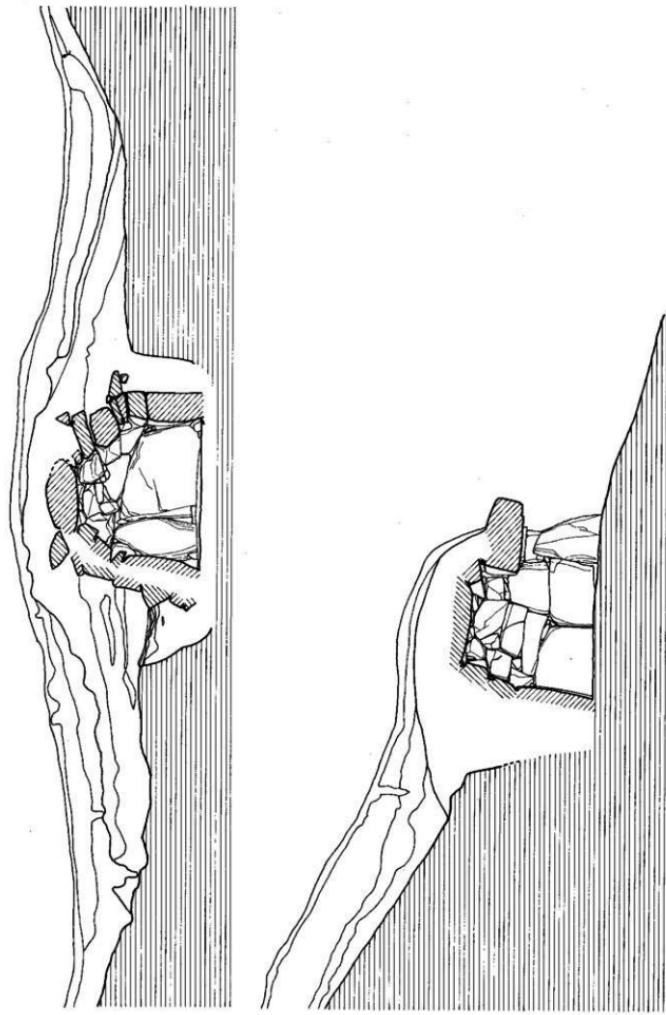
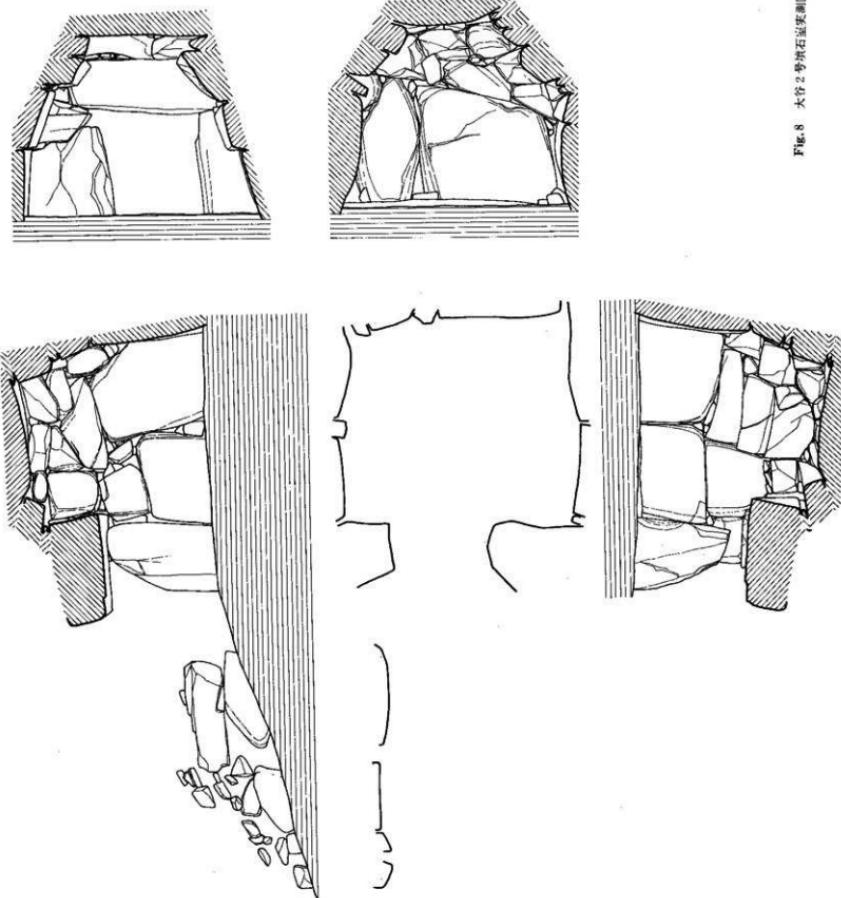


Fig. 7 大谷 2号堆积层断面图 (1/60)

Figure 8 大谷 2 号洞石室実測図 (1/40)



### (3) 横穴式石室 (Fig. 5)

本墳の埋葬施設は主軸方向を N—14.5° W にとり南側（谷）に向って開口する単室の両袖型横穴式石室である。石室は玄室は完全に遺存しているが、狭道右壁および左壁の上半、天井部を失っている。狭道左壁も地すべりのため原位置を若干動いていると考えられる。石室内には若干の埋土が存在したが、内部はすでに盜掘を受けている。床面には敷石等の配慮はみられない。石室はやや幅広の方形プランを有し狭道を連接させたものである。石室全長は現存で 5.5 m を超す。

石室を構築する石材はすべてが花崗岩で、転石あるいは割石が使用されている。

#### 玄室

奥壁 2.25 m、前幅 2.3 m、右壁長 2.15 m、左壁長 1.95 m を測り、やや横幅の広い方形プランを示している。壁体の構築法は各壁体ともに共通している。奥壁および左右壁には 1 m × 1 m ~ 1.4 m × 1.2 m 程度の大ぶりの割石もしくは面を整えた転石各 2 個を横位にたてて配し腰石をしている。奥壁の 1 個は縱位にたてられる。腰石から上方はやや大ぶりの割石、板石を水平方向に目路か通りように横積みをしている。奥壁、左右壁の腰石はわずかに内傾し、腰石上方から持ちおくり天井部へと移行する。奥壁と側壁の隅角は腰石部で奥壁をはさみ込むように配置するが、腰石の上からは互いに重なる三角持込み手法を用いている。天井部は一枚の巨石を用いる。床面から天井までの高さは 1.8 ~ 1.9 m である。

玄門部は素型の両袖で特別の施設はない。袖幅は左袖が 0.45 m、右袖が 0.85 m で左壁が狭い。袖石には未加工の転石を縱位に立てて、右袖石上にはさらに 2 石を横積みにし左袖石と高さをそろえ、1 個の巨石を構築し玄門部までの高さは 1.1 m をはかる。

床面には数個の石材が見られる。敷石が行なわれたと考えられるが、その範囲については不明。

#### 蓋道

右壁、天井部を欠失する。左壁も地すべりで遺存状態が悪く腰石を残すのみである。現存長 3.07 m をはかる。

### (4) 遺物

#### 出土状況

石室内はすでに盜掘を受けていて小破片となつた須恵器、土師器が散在していたにすぎない。特記すべきものとして鉄滓 8 個が床面上より出土した。他例から類推しこれらの鉄滓が他より混入したのではなく、当初より副葬されていたものと考えることができる。

石室外では狭道左側の墳丘中に土師器（甕、盤）、須恵器（大甕、壺、壺）、鐵鎌が一括して

出土した。これらの一括遺物は墳丘盛土中にみられるものであるが、墳丘の遺存状態が悪く、墳丘形成後に埋め込まれたものか、墳丘形成途中に入れ込まれたものであるかの区別は困難であった。

本頃から出土した遺物は次の如くである。

容器 須恵器

土師器

武器 鉄鎌

その他 鉄津

須恵器

杯蓋 (Fig. 9)

6個体の出土がある。整形技術法、形状により次の3類に大別する。

I類は径11cm前後の小型品で、内面にかえりをもち、内面のかえりは口端部より下方に突出するもの。II類は天井部が平坦で内面のかえりは口端部とほぼ同じもの。III類は内面のかえりを失い、端部が下方にのびるもの。

I類-a (Fig. 9-1) 天井部は丸く、口縁部はゆるやかに外へひらき端部は丸くおさめられる。内面のかえりは低く、口端部よりわずかに下方にのびる。天井部のヘラ削りは $\frac{1}{2}$ の範囲に施される。天井部内面には粘土巻きあげ痕がうす巻き状に残る。内面のかえり、口端部は横ナデ調整。胎土には多量の石英粒を含む。焼成は不良で褐色をなす。口端径10cm、器高2.9cmである。

I類-b (Fig. 9-2) I類-aと同様の形狀をなすが、天井部中央につまみを有する。内面のかえりは口端部より突出する。端部は丸くおさめられる。ヘラ削りは天井部の $\frac{1}{2}$ の範囲に施される。他はナデによって調整される。焼成は良好で、色調は黒灰色をなす。径11.4cm、器高2.9cmをはかる。

II類 (Fig. 9-3~5) 天井部は平坦で、体部と天井部の境は不明瞭、口端部は丸くおさめられる。内面のかえりは低く内傾し、口端部とほぼ同じである。天井部は $\frac{1}{2}$ の範囲に荒いヘラ削りが施される。他はナデによって調整される。胎土には砂粒を含み、焼成は不良、色調は褐色をなす。口端径13.2cm~14cm、器高2.6cm~2.8cm。

III類 (Fig. 9-6) 天井部中央に擬宝珠形のつまみを有するものであるが、つまみは欠失する。平坦な天井部から体部、口縁へ移行し、口端部はわずかに下方へのびる。内面のかえりはない。口端部内面には凹線一条がめぐる。天井部は $\frac{1}{2}$ の範囲にヘラ削りが施される。口径14cm、復原器高2.4cmである。焼成は良好で黒灰色をなす。

杯

3個体の出土がある。器形より2類に分類する。

I類 (Fig. 9-7) 底部は丸く口縁部はわずかに外反しながらたちあがる小型の杯である。

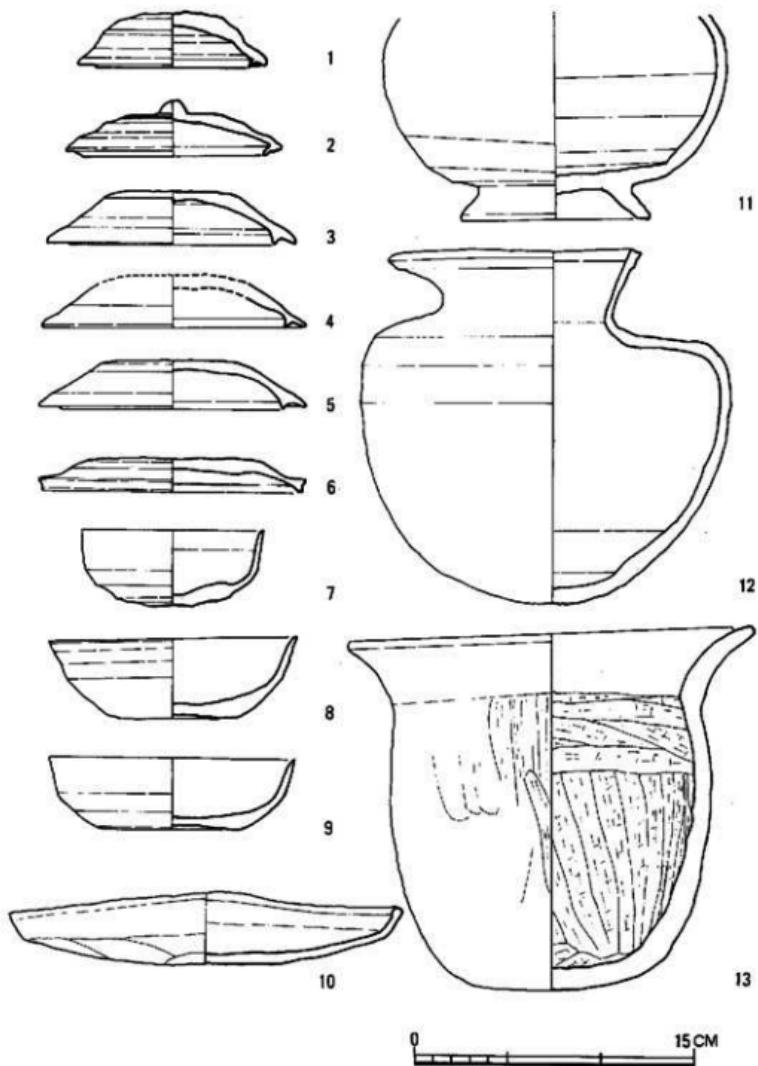


Fig. 9 大谷 2 号墳出土遺物実測図 I

内底部に粘土まきあげ底がうず巻き状に残る。底部はヘラ削りで調整され、他はナデによって調整される。焼成は不良で色調は赤褐色をなす。口径9.7cm、器高3.9cm。

II類 (Fig. 7-8~9) 底部はわずかにあげ底になる平底で口縁部は外反しながらちあがり端部は尖る。体部口縁部、内底部はナデによって調整される。口径13.2cm~13.3cm、器高4.2~4.3cm。胎土には砂粒を含み、焼成は不良で、色調は赤褐色~褐色をなす。

#### 長頸壺 (Fig. 9-10)

体部上半部、口頭部を欠失している。脚台は高く、下方へひろがり安定している。脚端部は丸くおさめる。体部下半にカキ目調整が施される。脚端径10.1cm。体部は丸く球状に近い。焼成は良好で、色調は黒灰色をなす。

#### 小型壺 (Fig. 9-11)

焼けひずみが著しく、いびつである。口頭部は外側へ開き、口縁部は肥厚させる。外側に一条の凹線をめぐらす。頭部にはしばりの痕跡が認められる。頭部の最大径は上部にあり、底部は丸底をなす。体部下半は平行叩きが行なわれ、内面の下半部は同心円文の叩きがみられる。体部上半および口頭部はナデによって調整される。肩部にヘラ記号が認められる。体部最大径19.4cm、器高18.5cm、胎土には砂粒を含む、焼成は良好で色調は黒灰色をなす。

#### 土師器

4個体の出土がある。共に墳丘よりの出土で、壺、盤がある。壺は2個あるが、1個体は胴下半部で器形は図示したものと同様と考える。

#### 盤 (Fig. 9-12)

口縁部が内側に丸く肥厚し段をなす。底部には平行したヘラ削りが施され、他はナデによって調整される。胎土は精良で、焼成は良好、色調は赤褐色をなす。焼けひずみがあり器形は全体にいびつである。最大口径20.9cm、器高36をはかる。なお、同器形をなすと考える破片があるが、復原不可能である。

#### 壺 (Fig. 9-13)

平底に近い丸底をなし、体部は張らず円筒になり強く外反する口縁部を有する器形をなす。口縁部はわずかに肥厚し、端部は丸くおさめられる。体部の外面は縦位のヘラによる調整が施され、内面の下半は斜めのヘラ削り、上半は横位のヘラ削りがみられる。胎土には荒い砂粒を多量に含み、焼成は良好、色調は黄褐色をなす。口径22.7cm、器高19cmをはかる。なお、口縁部内側の端部に近く粗圧痕がある。別の1個体も同様の形状をなす。

#### 武器

鉄鎌 (Fig. 10) 総数10点の出土があるが、いずれも破片で完形を保つものはない。鋒部の破片が6点ありその形状より2類に分類できる。

I類 (1~3) は4点あり、鋒部は闊をもたないのみ形をなすもの、II類 (4~6) は3点

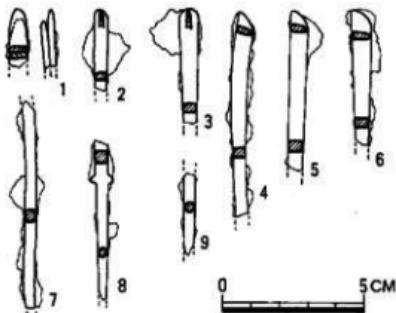


Fig. 10 大谷古墳群出土遺物実測図II

### 3. 大谷3号墳

#### (1) 位置と現状

1号墳、2号墳をのせる丘陵と谷をはさんで短く突出した丘陵尾根上に位直する。1号墳、2号墳との直線距離はそれぞれ60mと80mである。古墳基底面は標高約77.5mの地点である。古墳は尾根上に立地し、なおかつ小規模であるために墳丘の淀尖により古墳としての識別は困難であった。事前踏査の段階では確認もれとなっていたもので、現状では尾根が一坦平坦となり小規模な墳丘のように観察され、平坦面に一部花崗岩の石材が露出し古墳との疑いをいただき、平坦面頂部を中心として十字に交わるトレンチを設定し、古墳であることを確認した。

#### (2) 外部施設

##### 地山整形

古墳は丘陵尾根上に尾根と平行して小規模な石室を構築するものである。したがって、古墳構築のための地出整形は尾根の掘削による平坦面の確保と墳丘基底面の整地という二つの作業よりなる。

平坦面の確保は約20度の傾斜を尾根の標高79mほどを上端としてカットしてテラス状に整地し平坦面を作り出す工程であり、次の墳丘基底面の整地は、第一工程での平坦面を尾根にそって半円状に整形するものである。地山面での平坦面は長径4.6m、短径2.6mの半円状をなす。尾根と上端の間は墳丘盛土によって結果的には尾根と墳丘を区画するような馬蹄形状の溝が存

あり、I類同様に間に有せず片刃式をなすものである。I・II類共に棒状部と茎の境には8にみられるような棘を有すると考えられる。

在する。本墳における地山整形は尾根上に占地する古墳としては典型的な地山整形の方法をとったものである。

**墳丘** 墳丘の盛土は地山整形された下端部を墳裾として地山整形面をおおうように行われる。ただⅠ・Ⅱ・Ⅲ区では、地山整形の段階で行われた掘削面と平坦面の境を墳裾とするために墳裾の標高に若干の差異が生じている。また前述したように盛土によって尾根側では馬蹄形状の溝ができる。溝幅約80cm、溝高約50~60cmで、尾根と墳丘を区画している。

盛土は硬くしめられたものでなく、黄褐色土層一枚で地山整形面をおおう。盛土の厚さは現存で約50cmであるが、盛土の流失が著しく、特に南側と西側は土砂の流失により変形されていて、石室蓋行も露出している。元来の盛土はさらに高いものであったろう。なお墳丘底面に近く、盛土中に石室を中心半円状（半径1.5m）に花崗岩角礫10個を用いた配石がみられる。配石は西北部では良好に存在し、東北部はやや散乱した状態で、墳丘南面にはみることができないが、墳丘南面は盛土の流失が著しく配石も流失したことが考えられる。墳丘築造当時においては、石室を囲む径約3mの円形の配石が考えられるが、いずれも盛土中に存在し、墳丘面に露出するものではない。

墳丘の規模は東西径6.4m、南北径5.6mの横円形プランをなし、墳丘高は東で約50cm、西で1.2mをはかる小規模なものである。

**墓域** 墓域は地山整形・盛土が一部行われ、前述した配石が行われた段階で掘り込まれたと考えられ、盛土中の配石のある面で墓域の掘り方を確認した。平面形は長径約2m、短径1.6mの長横円形をなす。深さ約50cmである。墓域底は平坦であるが、腰石の部分は安定のために溝状に掘りくぼめている。

### (3) 穴式石室

本墳の埋葬施設は主軸をN-89°Wにとる竪穴式石室である。石室は内部に流土が充填していたが完全な姿で残っていた。後世における盗掘・擾乱は全く認められない。床面には敷石が存在し、石室からは耳飾1対が出土したのみで他に遺物はみられなかった。

石室は主軸長95cm、東壁幅65cm、西壁幅50cmの台形に近い平面プランを有する。以下石室細部について詳述する。

石室は壁体の構築法については横穴式石室のそれと同じであるが、渋道の付設はなく、いわゆる竪穴式石室である。石室は東壁（奥壁）幅65cm、西壁（前壁）幅50cm、北壁（左壁）長95cm、南壁（右壁）長88cmの奥壁の広い台形に近いプランを示す。壁体の構築法は各壁体共に共通している。奥壁・前壁に各1枚、左右壁に各2枚のやや大ぶりの石を配し腰石としている。奥壁の腰石は左右壁の腰石にはさみ込まれるように配置され、前壁の腰石は奥壁とは逆の状態

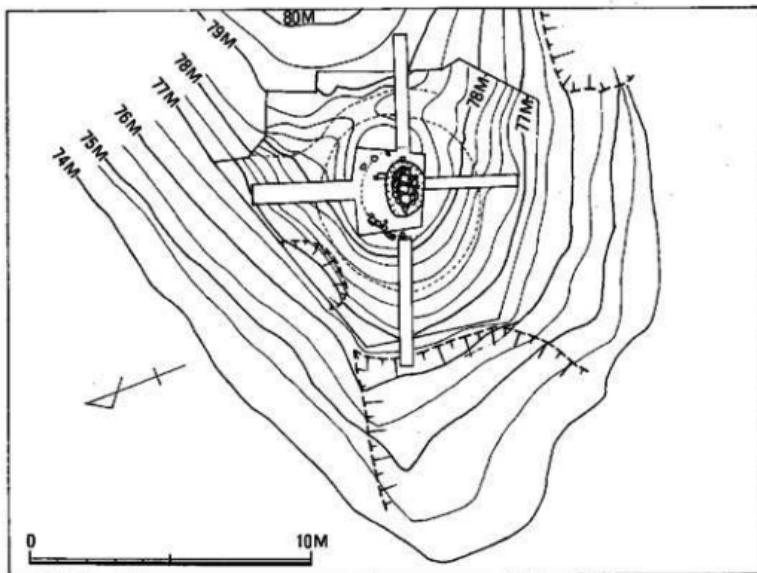
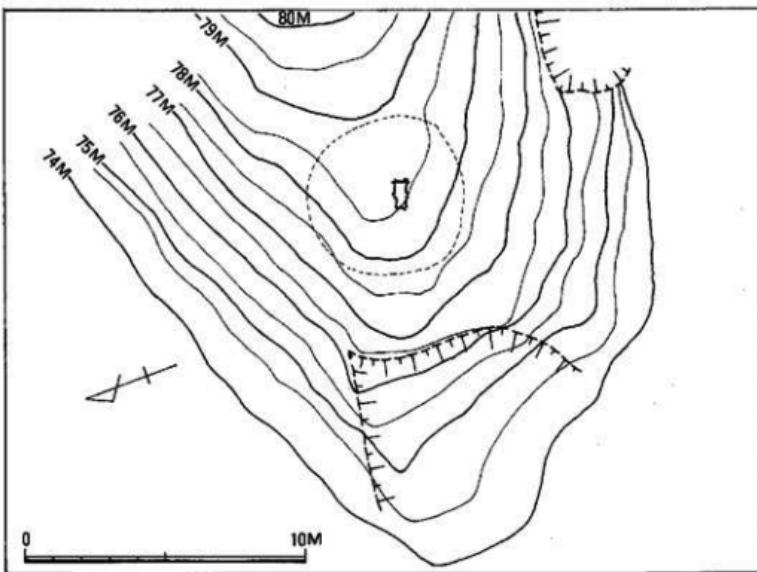


Fig. 11 大谷 3 号墳墳丘測量図（上：発掘前、下：発掘後）

で配置される。腰石は奥壁とそれに接する左右壁が他よりいくぶん大きく重厚である。腰石の配置順位は、奥壁→左右壁→前壁と考えられる。左右壁の腰石接合部には扁平な割石をあてがっている。各壁体は腰石とはば垂直に立て、その上方には割石を横積みに3~5段持送りに目路が通るように積みあげる。石室上面では、長60cm、幅20cmの口が開いているにすぎず、蓋石(天井石)三枚でふさぐ。石室に使用されている石材はすべてが花崗岩の割石で総数69個を数え、そのほとんどは一人で持ち運びが可能であるが、中には二人以上の力によらねば持ち運びが不可能な石材も存在した。この石室の構築にあたっては、少くとも二人以上の人間が必要であることを示している。

床面は、墓壙底に約4cmほど埋め土をなした後、挙人の角礫約50個を石室全面に敷きつめている。床面より蓋石下面までの高さは65cmをはかる。

#### (4) 遺 物

##### 出土状況

石室内は盜掘等の搅乱は受けでなく、当初の姿を良く残していたが、遺物は極めて少い。奥壁より約20cm離れた石室中央部に12cmの間隔をもって出土した一対の銅環のみで、他に遺物はない。銅環の出土状態は着装されていたものと考えられ、奥壁部に頭位を定めたものと推定される。他に墳櫃の溝端より上師器杯1点の出土がある。上記遺物については保存状態が悪く、図示するのが不可能であった。

##### 土師器

杯 径11.4cm、器高4.8cmをはかる。須恵器の杯を模倣した土師器で、たちあがりは高い。たちあがり部はナデ調整、底部・体部は横位のヘラ研磨が行われる。胎土は精良で、焼成は固く、色調は内面が黄褐色、外側が赤褐色をなす。

##### 装身具

銅環 腐蝕が激しい。共に径2.2cm、断面0.3cmの円形をなす。

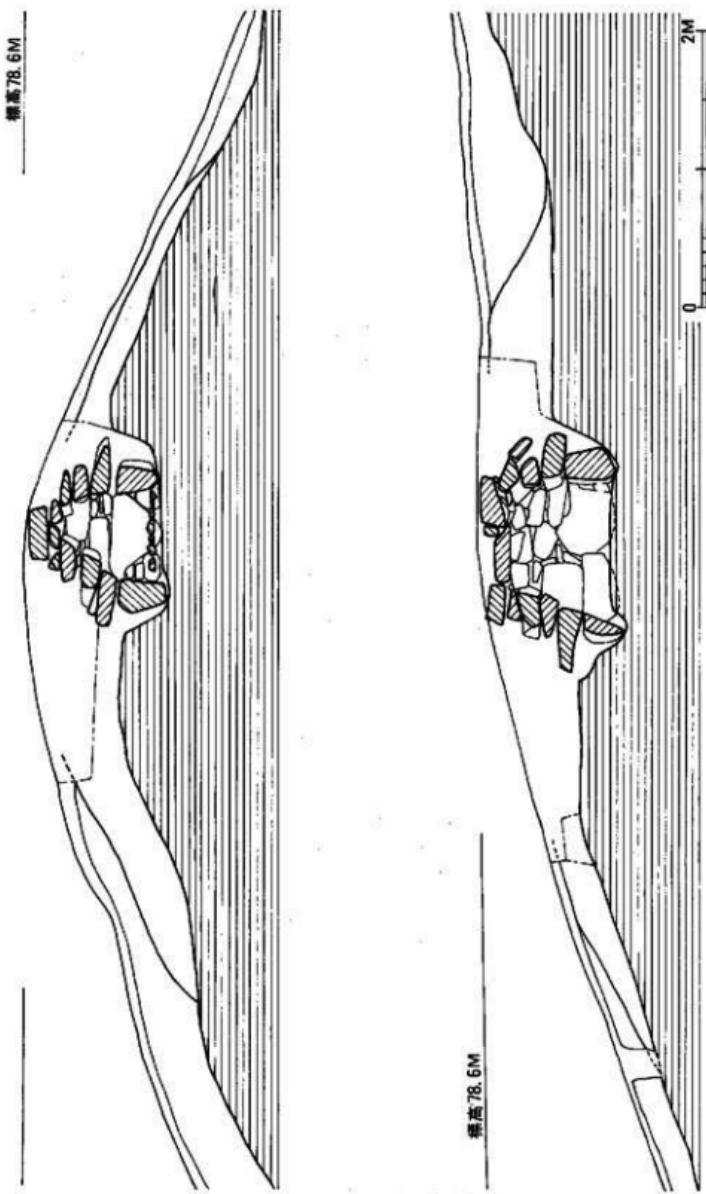


Fig.12 大谷 3 号墳墳丘断面図

標高78.6M

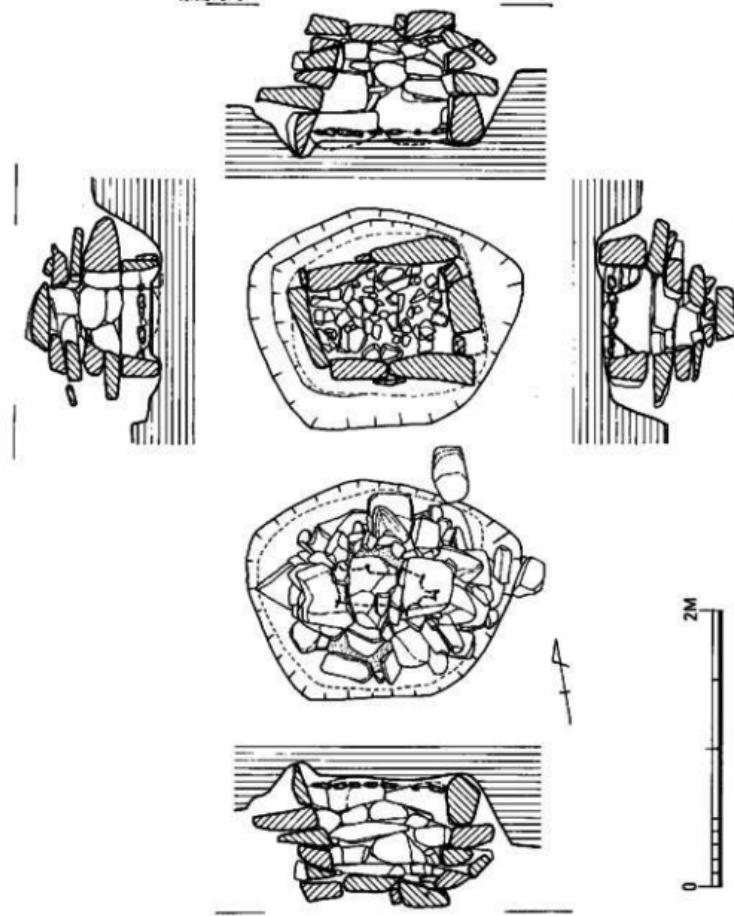


Fig. 13 大谷 3号墳石室実測図

## 4. 黒色土層の調査

### (1) 遺構

第一次調査対象地区内に黒色土の堆積のある地点が4ヶ所確認されていて、製鉄との関連性で発掘調査の対象となっていた。4ヶ所にそれぞれトレントを設定しその性格を追求したが、製鉄との関連性を示す積極的な証明はうることができなかった。ただ第二地点とした黒色土の堆積中より須恵器、土師器の出土があった。しかしその頂上部には、第8号墳が位置し黒色土層中より出土する須恵器、土師器の量は頂部に近づくに従い増加する。このことは、これらの出土遺物が黒色土層と直接の関連を有するものではなく、第6号墳の墳丘に存在した遺物が、墳丘の流失に伴い黒色土層と共に流れ込んで再堆積したものとみるのが妥当である。4ヶ所の黒色土の堆積はいずれもがその存在する地区が谷間ないしは凹地をなす部分であり、前述した第2号墳の墳丘の凹地にも同様の黒色土が堆積していることなどより考えれば、これらの黒色土層は製鉄と関連させるよりも、地表面の有機質土層が流失し、凹地に集合し再堆積とした方がより妥当性があるものと考えている。しかし、調査した7基の古墳中の5基にスラッグが伴うことは、これらの黒色土層のすべてが製鉄と関連性のないものとするにはなお検討の必要性がある。

### (2) 遺物

黒色土第2地点の黒色土層中より出土したもので、第6号墳の遺物とみることができるものである。遺物は須恵器、土師器でありそのうちの大部分は須恵の大甕の腹部破片である。

#### 須恵器

杯盤 (Fig.14-1, 2) 2点の出土がある。1は丸みをもつ天井部よりゆるやかに口端部に移行し、体部と天井部の境は明らかでない。口縁端部はうすくなり尖る。口径10cm、器高2.7cmにも同様の器形をなすが1よりやや大きい。口縁部および内面は横ナデによって調整される。口径12cm、1・2共に胎土には多量の砂粒を含む。焼成良好灰褐色をなす。

脚台 (Fig.14-4) 施等の脚台になると考えられるもので小破片である。脚端部は水平に切られる。外面に2本を単位とした凹線が3条にめぐり、それによって区画された内側に荒い横目波状文がみられる。内外面共に横ナデ調整される。胎土に砂粒を含む。焼成は良好で赤褐色をなす。

甕 (Fig.14-5) 甕の頸部破片と考えられるものである。口縁部は欠失するが段をもってた

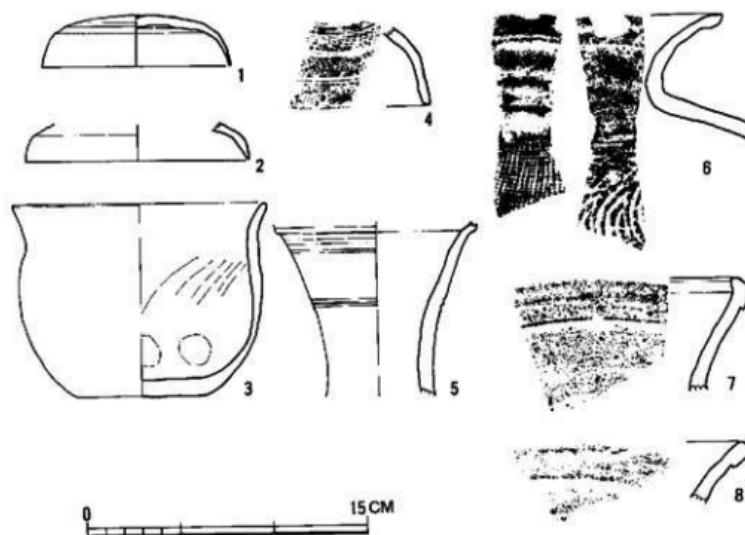


Fig. 14 黒色土層出土遺物実測図

ちあがるものである。頸部の上部と中央部に 2 本を単位とする凹線がめぐる。内外面共に横ナデ調整が見られ、頸部にはしづりの痕跡が認められる。胎土には多量の石英砂を混入する。焼成は良好色調は黒灰色をなす。

**大甕 (Fig.14- 6 ~ 8 )** 共に口縁部破片である。6 は頸部から強く外反する口縁部で口端部外面が丸く肥厚する。体部は外面に格子目文、内面に同心円文の印きがみられる。胎土、焼成は良好、灰色を呈す。7 も 6 と同様に口縁部外面が肥厚するが端部は屈曲したちあがる。胎土に多量の砂粒を含む。焼成は良好。色調は灰色をなす。8 も同様に口縁部外面が折りかえしによって肥厚する大甕の口縁部である。内外面共横ナデの調整がみられる。胎土は精良、焼成はややあまく白灰色を呈する。

**土師器 (Fig. 14-3)** 小型の鉢形をなす。口縁部はわずかに外反し、口縁邊部は丸くおさめる。口縁部の内外面には横ナデが施され、胴部、底部は多方向のヘラ研磨が施される。内面は斜位のヘラ削りで底部近くで指による調整がみられる。内底部も多方向のヘラ削りが行われる。口径 13.6cm、器高 10.3cm、胎土に多量の砂粒を含む。焼成は良好色調は黄褐色をなす。

### 第3章 総括

大谷古墳群は10基よりなる古墳群である。その中の3基を第一次調査（今回報告分）において、4基を第二次調査において発掘調査を実施した。残る3基の古墳も古くより石室が開口していて、その内部主体が横穴式石室であることが判明している。本古墳群もまた第3号墳の内部主体である小型竪穴式石室を除いて他の9基の古墳の内部主体は横穴式石室であり、古墳時代後期群集墳の一般的な様相を示している。

以下、すでに報告された第二次調査の古墳も含めて若干の考察を加えてみたいと思う。なお、本古墳群と谷をはさんで東側に隣接する倉瀬戸古墳群、北側に占地する七隈古墳群は、二者共に大谷古墳群と類似する点が多く、被葬者の性格にも共通点を有しているものと考えている。本古墳群を理解する上にも重要であり、すでに報告書の刊行で内容の明らかな倉瀬戸古墳群を参考しながら論を進めていきたいと思う。<sup>註①</sup>

#### 1. 古墳の年代と群の構成

第一次、第二次調査を通じて発掘調査を実施した古墳は、古くより石室が開口していて盗掘、石材の除去等によりその状態はかならずしも良好なものではなかったにもかかわらず漢道部あるいは埴丘より遺物が比較的良好な状態で出土し、古墳の築造年代および使用期間の一端を知る上で好都合であった。各古墳より出土した遺物は次の如くであるが、須恵器がその大半を占める。

石室構造	須恵器、土師器	須恵器型式	その他の遺物	スラッグ
1号墳 横穴式石室(單)	杯蓋、身、長颈壺、瓶	V, VI	鉄錠、U字形掛先	
2号墳 横穴式石室(單)	杯蓋、身、長颈壺、鏡、盤	V, VI, VII	鉄錠	8個
3号墳 竪穴式石室	环		銅環	
4号墳 横穴式石室(單)	平瓶、高环、盤、堆、皿 杯蓋、身、長颈壺、短颈壺	VI		21個
5号墳 横穴式石室(複)	大甕、横瓶、杯蓋、身 高环、匙、鏡、瓶、盤	IV, V, VI	刀子、不明品	464個
6号墳 横穴式石室(單)	杯蓋、身、瓶	VI, VII		336個
7号墳 横穴式石室	大甕、長颈壺、甕	VI		240個

註① 総合「大谷古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第19集、1972年

註② 小田 富士雄編「倉瀬戸古墳群」1973年

須恵器の各型式は上に記したが、これらの須恵器の示す年代をもって古墳の築造年代およびその使用期間のすべてを表わしているとみると、本古墳群の大部分が盜掘撲滅を受けていることや、当時の追葬時における諸事情を考慮すれば肯首しがたいことである。ただし、第3号墳の小型竪穴式石室の被葬者は、石室規模より推定し小児であり初葬のみで終了したことは、古墳が盜掘撲滅を全く受けていなくて当初の姿を保っていたことや、遺物の出土状態からも肯首できる。

ここでは古墳の築造年代を最近著しく研究の進展がみられる石室平面形の企画性と出土土器<sup>註③</sup>によって推定し、その使用期間は出土土器によってみてみたい。

大谷古墳群と谷をはさんで東側に隣接する倉渕戸古墳は9基が発掘されその内容が明らかなものである。内部主体の横穴式石室は石室の規模、平面形の分析より3期に分類が可能である。<sup>註④</sup>

第I期に分類できるのは、第3号墳、第9号墳、第4号墳、第1号墳である。第3号墳と第9号墳は複室を有し、第4号墳も玄底部巖石が第1巖石、閉塞石内側で縦位に配置され、石室構造に複室を意図したことがうかがえる。玄室平面形は長方形を示し、4基共にその規模は同様で、平面形の企画は普尺系尺度によっている。

第II期に分類できるのは、第5号墳～第7号墳である。石室は单室で玄室平面形は、ほぼ方形を示し、3基共にその規模は同様であるが第I期の石室規模に比較し小型化する。平面形の企画は高麗尺によっている。

第III期に分類できるのは、第2号墳と第8号墳で、石室は单室でその規模は第II期に比較しさらに小型化し、玄室平面形は幅広の長方形を示している。

以上の3期の区分について玄室平面形の変遷をみると、長方形プラン→方形プラン→幅広の長方形プランという移行を把握することができる。また、これらの区分に時間的関係を与えれば、第I期は6世紀後半、第II期は6世紀末～7世紀前半、第III期は7世紀後半に比定される。

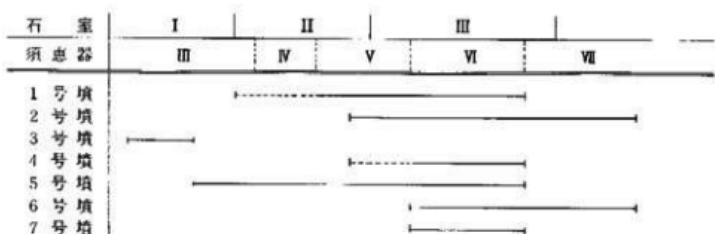
これらの石室分類を基準として、大谷古墳群を見てみよう。発掘調査を実施した7基の古墳のうちで石室平面形の判明するものは6基である。第3号墳は小型竪穴式石室であり前述した如く初葬のみで終了し、出土した土師器よりその築造年代は第I期と平行関係にある。5基の横穴式石室の中で最も古いと考えられる石室平面形を有するのは第5号墳である。石室は複室で玄室はわずかに奥行きが長い方形プランを有し石室平面形の企画は高麗尺によっている。方形石室の定着する以前の第I期と第II期の移行期に比定できる。次にくる石室平面形を有するものに第1号墳、第2号墳、第4号墳がある。共に石室平面形の企画には高麗尺が使用されている。玄室の平面形は第1号墳が方形、第2号墳、第4号墳はやや幅広の方形を示している。

註③ 九州においては、梅沢氏の一連の研究がある。

④ 梅沢一男氏の御教示による。1期以前に整大系圓口式石室の存在がある。

第1号墳は第II期の前半、第2号墳、第4号墳は第II期の後半に比定できる。第6号墳は石室が小型化し、玄室平面形は左壁を欠失しているが、その復原形は幅広の石室平面形を有するものと考えられるので第III期に比定される。

以上の石室変遷過程の中で大谷古墳群の概略の築造年代をおさえることができる。この築造年代に出土土器の示す年代をあてはめたのが次表である。

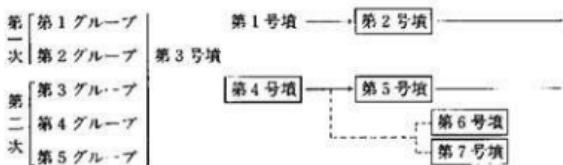


次に以上の結果をふまえて群の構成について考えてみたいと思う。発掘調査を実施した古墳は自然地形より大きくては第一次調査分の3基と第二次調査分の4基とに区別できる。いずれも谷をはさんで比較的まとまりのある分布を示している。これらを築造年代の時間的関係および群の構成についてみる。

第一次調査分の3基の古墳の中で、最も先行するものとして第3号墳があげられる。第3号墳は位置する丘陵が1、2号墳とは異なり、谷をはさんだ丘陵尾根上に占地し、径6m前後の円墳で、内部主体に小型脇穴式石室を有し被葬者は小児と考えられる特殊な古墳で、第1、2号墳とは積極的な関係はもとめられない。第3号墳は単独で存在するものと考えられ接続する古墳の型式は同一丘陵には存在しない。第1号墳、第2号墳は同一丘陵斜面に位置し、約70m離れている。時期的には第1号墳が先行する。第1号墳は巨石墳で大谷古墳群中最大の規模を有する。第1号墳、第2号墳共に玄室床面には敷石があったと考えられるが範囲は不明、出土須恵器には類似性が強く認められ、焼けひずみのあるものが共に多い。また、調査した古墳の大部分はすでに盗掘擾乱されているといえ、第1、2号墳のみが武器（鉄鎌）を出土しているという共通性があり、第1、2号墳の間には何らかの関係をみいだすことができる。1、2号墳は1群と考えることができる。しかし、第1号墳にはU字形鋏先、第2号墳にはスラッグが石室内より出土していることは注意する必要があろう。

第二次調査分の4基の古墳の中で築造年代が最も先行するのは第5号墳で、次に第4号墳、第6、7号墳は最もおくれた築造である。第4～6号墳は同一丘陵の斜面ないし、頂部に位置し、第7号墳は第4～6号墳とは谷をへだてた東側丘陵斜面に位置する。この中で第4号、第5号墳は近隣し、両墳共に地形的制約によりその基礎構築には多大の労力を費している。第4

号墳は斜面に対し直交する石室、第5号墳は斜面に平行した石室が構築される。斜面側の基礎構築は、第4号墳では石室前面に半円状に石積みを行い墳丘基底面の確保につとめ、第5号墳では斜面側に三段の葺石状の石積みがある。また、第5号墳については墓道の確認がないが、葬道部左壁が右壁に比べて長く、黒色土、遺物の分布より葬道（墓道）は谷側に屈曲し、枝道で第4号墳の墓道と接続するものと考えられる。以上の結果より第4、5号墳は1群として把握できる。第6号墳は第4、5号墳とは同一丘陵に存在するが、その占地が頂部であり、立地条件を異にし、この段階に新たに古墳の築造を始め1基のみで終了した単独の古墳として把握される。第7号墳も第6号墳と同様に考えるが、第7号墳は葬道部を残すのみで他は流失しているように、丘陵全体に土砂流が激しく、第7号墳に先行する古墳があった可能性もある。以上の結果をまとめると次のようになる。



## 2. 被葬者の性格

大谷古墳群の性格を最も特徴づける遺物として、石室あるいは前庭部より出土した多量のスラッグをあげることができる。発掘調査を実施した7基の古墳のうち5基にスラッグを認めることができる。スラッグはいずれの場合も流れ込みではなく意識的に古墳に供献された状態を示している。5基の古墳のスラッグ出土状況を概観すれば次のようになる。

第2号墳 玄室床面に8個のスラッグが散在。

第4号墳 葬道部周辺にスラッグ4個、玄室内に17個のスラッグが散在。

第5号墳 葬道部から前庭部にかけて250個のスラッグ。前室に23個、玄室に191個のスラッグが散在。

第6号墳 玄室に30個のスラッグが散在。前庭部に308個のスラッグが一括して出土。

第7号墳 葬道部より前庭部にかけて約240個のスラッグが散在。

なお、第二次調査において石室床面および前庭部にみられる黒色土も他よりスラッグと共に撒入されたとしているが確証に乏しい。

注⑤ 水野 正好「群集墳の構造と性格」『古代史発展』⑥ 1975年

このように石室内および前庭部にスラッグを供獻した例は、倉瀬戸古墳群9基のうち5基に、七隈古墳群8基のうち1基に認められる。他に大牟田古墳群、影塚古墳、西油山古墳群、広石古墳群にも同様のスラッグの供獻があるが、大谷、倉瀬戸古墳群のように高密度のあり方を示していない。大谷、倉瀬戸古墳群は古墳の分布は散在的で共通し、西側に隣接する駿ヶ原古墳群が群集するとの対称的である。油山周辺において発掘調査を実施した片江古墳群、駿ヶ原古墳群C地区は大谷、倉瀬戸古墳群に近接するにもかかわらずスラッグの発見はなく、副葬品として武器、工具、馬具、農具がみられ調査者は「そこに被葬者の性格を農業生産に基く集團の突出した部分を想定し、あわせて地方軍事機構の一端を示すものと考えることはできないであろうか」としている。大谷古墳群にみられる生産用具は第1号墳のJ字形鋤先1点のみである。七隈古墳群においても生産用具の出土頻度は低い。スラッグ供獻の特殊性は注目される。スラッグは製鉄に関連した残滓であることはいうまでもないが、これらを供獻した内なる思想は別にしても、製鉄集団→製鉄→スラッグ→古墳への供獻という図式がもとめられ、大谷古墳群の被葬者は製鉄にたずさわった集団の突出した部分を想定することができよう。

スラッグの供獻された古墳について前章にふれた築造年代および群との対比で検討してみよう。大谷古墳群はその築造年代を若干異なるが、追葬の終末はほぼ同時期で須恵器VI期ないしVII期である。スラッグの供獻が初葬ないしは追葬時におこなわれたかは明らかにしがたいが、ここでは、初葬、追葬時に當時供獻があったものとして進めていきたい。

第1グループでは第1号墳にスラッグの供獻は認められず第2号墳にのみスラッグを伴う。第3～第5グループの古墳にはいずれもスラッグの供獻がある。これをグループ別にみると、最も先行してスラッグの供獻がはじまるのは第3グループで第4号墳にはじまり次の第5号墳へと引きつがれる。次の段階では新たに第1グループの第2号墳にスラッグ供獻がはじまる。最終段階には第4、5グループにもスラッグ供獻がはじまり、スラッグ供獻の古墳の増大を示す。このことは大谷古墳群の被葬者すなわち製鉄集団の生産と深いかかわりを示唆するものであろう。大谷古墳群における製鉄集団の被葬者は第4号墳の築造段階において製鉄を開始し、順次その生産力の増大をはかっていったことが推測される。古墳築造停止後、古代にいたっては筑前国の製鉄生産は延喜式卷24、主計寮上の貢納品の鐵。鐵をあげるまでもなく、早良、今宿におけるスラッグ出土地の数からその発展が著しかったことが知られる。<sup>註⑥</sup>

なお、第二次調査において検出された灰量2基については調査者は製鉄との関連性も考慮し

註⑥ 岩屋 恒利氏の御教示による。

⑦ 山崎 純男、柳沢 一男、浜石 哲也『広石古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第41集、1977年

⑧ 初田 和孝、柳沢 一男『片江古墳群発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第24集、1973年

⑨ 年代が不明なものが多いが、最近の調査例より古墳時代後期～古代に行われた製鉄であることが判明してきた。

ているが、炉壁の焼け方等からして、広石古墳群や高崎古墳群の横にみられたが状のものと同様で古墳に関連した祭祀と考えた方が妥当性のあるものと考える。

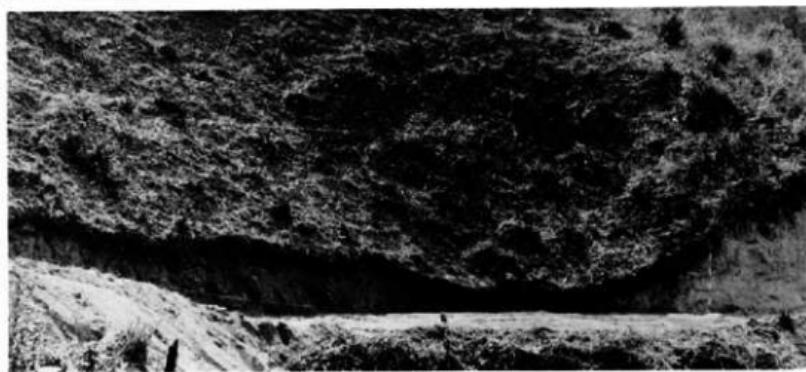
図 版

PLATES





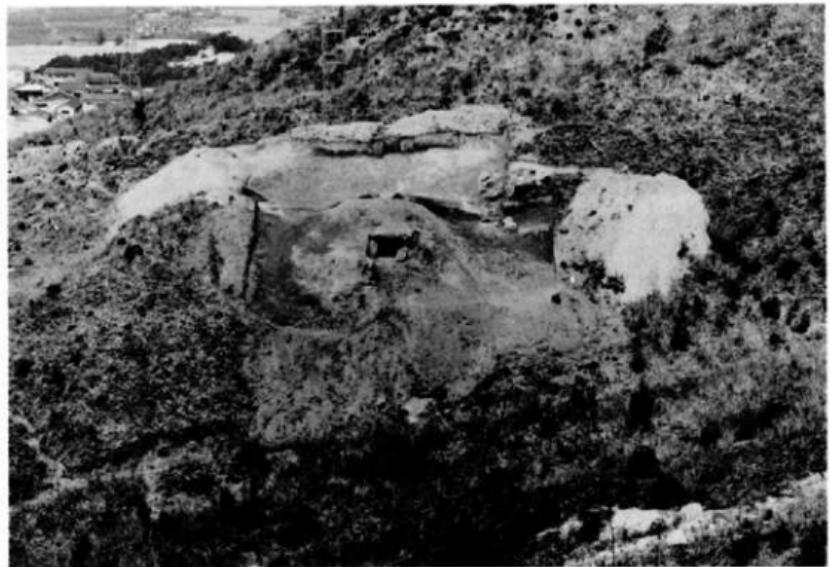
(1) 大谷 1 号填石室石組



(2) 黑色土層第 4 地点



(1) 大谷 2 号墳遠景 (発掘前)



(2) 大谷 2 号墳遠景 (発掘後)



(1) 大谷 2 号墳遠景 (東より)



(2) 大谷 2 号墳遠景 (発掘後)



(1) 大谷 2 号墳墳丘遺存状態（北より）



(2) 大谷 2 号墳墳丘遺存状態（東より）



(1) 大谷 2号墳の墓塚と石室（北より）



(2) 大谷 2号墳の墓塚と石室（西より）



(1) 大谷 2 号墳石室石組



(2) 大谷 2 号墳墳丘遺物出土狀況



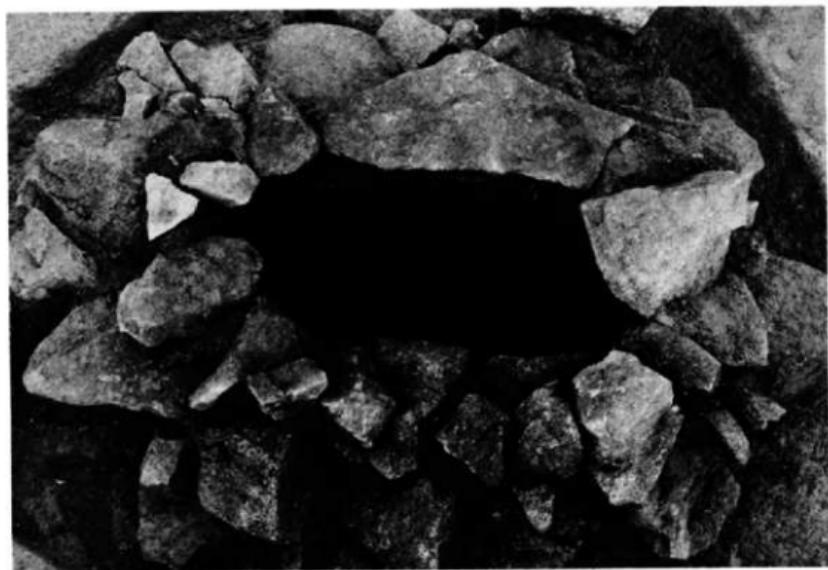
(1) 大谷 3 号墳の立地



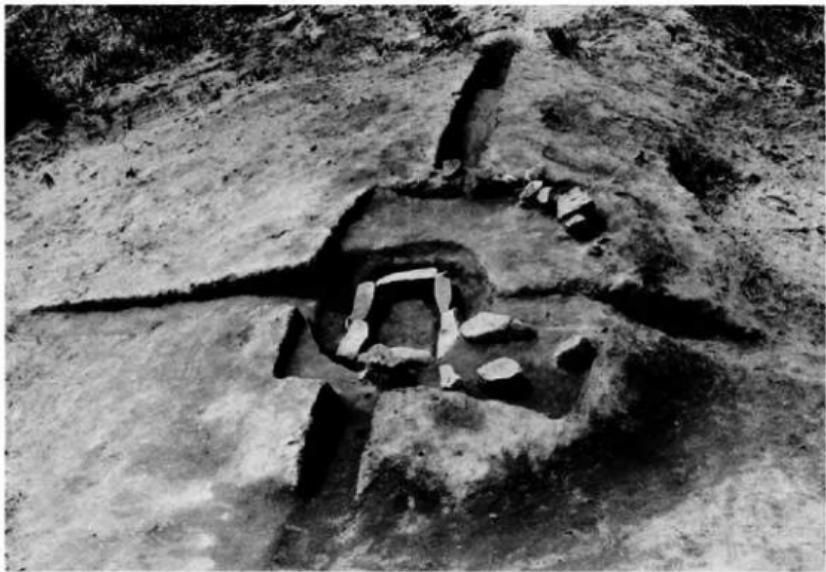
(2) 大谷 3 号墳全景



(1) 大谷 3 号墳の石室と配石



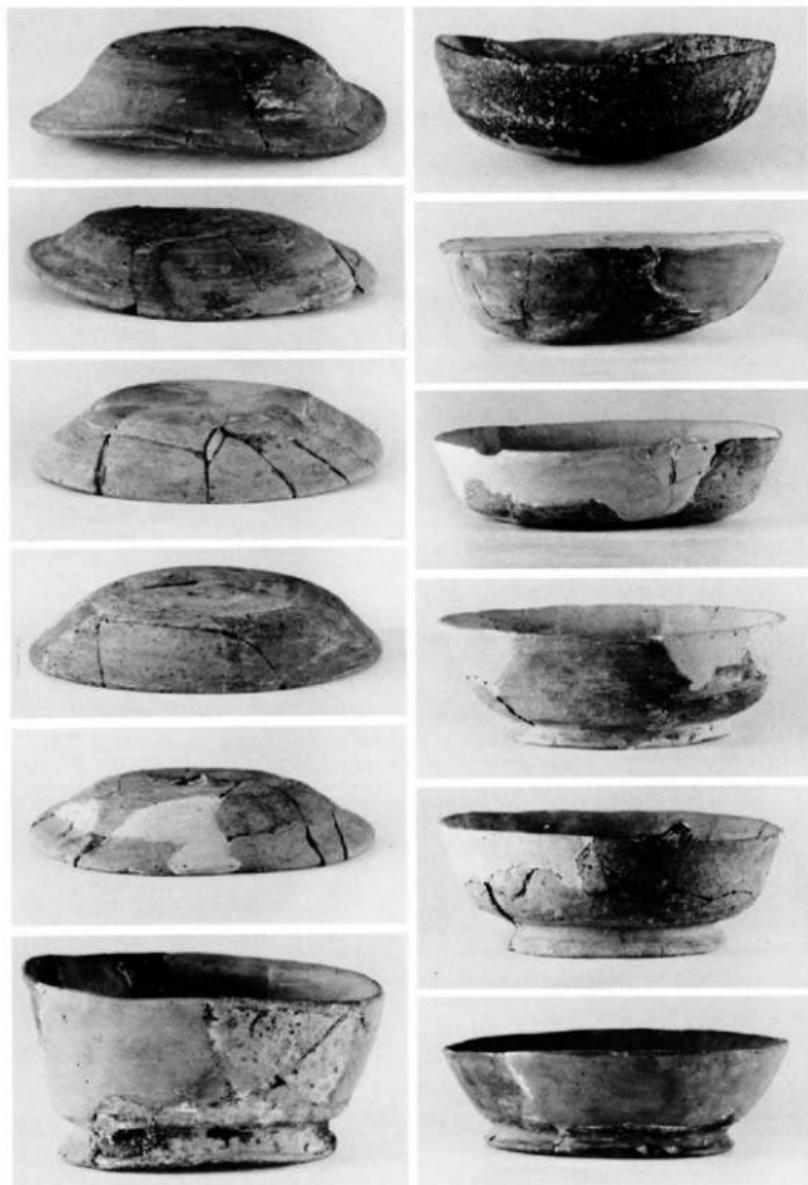
(2) 大谷 3 号墳石室



(1) 大谷 3 号墳全景 (石室腰石)



(2) 大谷 3 号墳石室腰石の状態



大谷 1 号 墓出土遺物



大谷1、2号填，黑色土出土遺物



---

福岡市城南区梅林

**大谷古墳群 II**

福岡市埋蔵文化財調査報告書122集

1985年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 赤坂印刷株式会社

福岡市中央区大手門1丁目8番34号

---

